猫蓑通信

第122号

令和五年
（2023年）
10月15日発行
（年4回発行）

連句・街歩き・八王子
――星布と絹の歴史をたどって

藤澤拓也

平林香織先生からお声がけいただいて、桑都（そうと）プロジェクト街歩き連句会「桑の都の吟行会～星布・祈りの痕跡を訪ねて～」に携わったのは昨年の五月。「桑都プロジェクト」とは、筆者が在籍する創価大学（東京都八王子市）の文学部が、研究室（ゼミ）の垣根を越えたインターゼミ形式で実施している地域振興プロジェクトである。地域の魅力を文学部から発信することを目指す本プロジェクトでは、例年八王子にまつわる人物・歴史・文化・産業等に注目した企画を実施しているが、二〇二二年度はその一環として、八王子横山本宿（現：八王子市横山町）出身の女流俳諧師、榎本星布の足跡と八王子の歴史を辿る街歩き連句会を、五月七日と二十八日に実施した。

榎本星布は、蕉風俳諧中興の祖と言われる俳諧師、加舎白雄の門下として女流随一と謳われた人物である。天明八年には、芭蕉の流れをくむ「松原庵」を継承し、松原庵二世を称したほか、旧甲州街道に面した竹の鼻一里塚（現：竹の花公園・八王子市新町）には、星布が建立した芭蕉顕彰碑が残り、菩提寺の大義寺（八王子市元横山町）には、女性としては破格の大きさの墓所が現存することからも、芭蕉――白雄の系譜に連なる一流俳諧師であることが分かる。

八王子駅北口、マルベリーブリッジに集合。左端が筆者

では、その榎本星布が生まれ、そして生涯を終えた八王子とはどういう場所であったか。先述の通り、星布が生まれたのは八王子横山本宿という甲州街道に面した宿場町である。そしてこの八王子は、江戸日本橋から約十里（四十キロメートル）の場所に位置しているが、当時の人々が旅をする場合に、一日三十～四十キロメートル歩いていたことを踏まえると、八王子は江戸に向かう人、江戸を離れる人双方にとっての一大中継地となっていたことは想像に難くない。

そしてもう一つ、八王子は絹産業の一大拠点としての側面を持っており、本プロジェクトの名称にも使われている「桑都」も、絹の原材料となる蚕の飼料として、桑がいたるところで栽培されていたという八王子の歴史が踏まえられた名称である。ご存じの通り、絹は着物の原料として高値で取引され、開国後は戦前まで日本の重要な輸出基幹産業であるとともに、八王子地域の発展の基盤となったものである。現在、

●目次●

▼連句・街歩き・八王子
――星布と絹の歴史をたどって――藤澤拓也 1
◎令和五年度猫簑同人会作品 歌仙六巻 4
◎第百六十四回例会
令和五年度猫簑会総会作品 歌仙六巻 7
◎第十四回猫簑会リモート作品 三巻 10
◎第十五回猫簑会リモート作品 四巻 11
◎第十三回猫簑会リモート作品未掲載分 一巻 12
◎第十六回猫簑会リモート作品 三巻 12
▼真夏の名古屋応援連句会――宮川尚子 14
▼連句の先達・誌上インタビューQ&A
その❸ 杉山壽子さん 14
▼事務局だより 16

ＪＲ八王子駅には中央線のほかに、町田・横浜方面とを結ぶ横浜線、群馬・高崎方面とを結ぶ八高線が八王子で接続しているが、これは生糸生産地である群馬と、生糸の輸出港であった横浜とを、絹産業の一大拠点である八王子を経由して結ぶためであった。このことからも、八王子が持つ絹産業の歴史と影響力の大きさがうかがえる。

　こうした歴史と、豊かな人流・経済の土壌を鑑みるとき、榎本星布という一流の俳諧師が八王子に生まれたことも、また必然であったように思えてならない。「星布」という俳号に「絹」に関連する「布」の一文字を有していることも示唆的であり、「星布」という俳諧師と八王子の「絹」「桑」の間には、強いつながりがあったのだろうと推察される。

　少々話が横道にそれたが、プロジェクトで実施した街歩きでは、こうした歴史にまつわる場所を訪れる形で吟行コースを設定し、八王子駅北口のマルベリーブリッジから、星布菩提寺の大義寺、芭蕉顕彰碑の残る竹の鼻一里塚、そして、八王子絹産業の源泉地として、今も美しい湧き水を湛える子安神社（八王子市明神町）を巡ったのち、連句会を実施した。各日参加者を二組に分け、完成した作品は次の通りである。

表合せ「星のつどひ」　棚町未悠　捌

星のつどひ時またなくに明けにけり　星布
月に見立てる都まんぢゆう　小鳥子
地芝居に教授天狗も現れて　未悠
俳女訪ねて歩む街道　貴雄
浅川の水満ちてゆく田植歌　喜雨
素足で遊ぶ笑顔まぶしく　香風
シルク織る姫に手鏡送りたる　未悠
花の便りに「かしこ」ひと言　喜雨
風光る桑の都の一里塚　貴雄
囀を聞く山のキャンパス　香風

表合せ「天の川」　平林香織　捌

天の川終は野末の流れかな　星布
月の舟に乗る王子八人　麗香
秋の声かそけく残りすれ違ふ　輝
いてふ並木をコーギーと行く　莉菜
水羊羹コレール皿の影となる　謳歌
四人姉妹の浴衣おそろひ　輝

二〇二二年五月七日首尾
於・町家カフェ金多屋

表合せ「星の手向け」　棚町未悠　捌

旅人の背中を星の手向けかな　喜雨
機窓から見る月は間近に　未悠
滝山城銀杏紅葉の夢の跡　蓮
都まんじゅうボトっと落とす　宮井
セラミックタイルを迷う女王蟻　謳歌
前途多難を創る神の子　錦川
一里塚花街道のシュリーマン　ハンナ
絹の大地に揺れる陽炎　執筆

大義寺の松原庵星布墓所

下・竹の鼻一里塚の説明板
左・星布が竹の鼻一里塚に建立した芭蕉顕彰碑

表合せ「星のちぎり」　　平林香織　捌

星のちぎり秋のまことを見するかな　星布
みたらしだんご月の土産に　莉菜
高尾山望むいちょうの涼やかさ　紫苑
小枝（さえだ）の小瑠璃宝石の歌　小鳥子
琉金に恋の涙のきらめいて　紫苑
ハンカチーフの絹の想い出　幸峰
アルバイトバイクで花の古本屋　友歌
肥沼医師の石碑麗か　貴雄

二〇二二年五月二十八日首尾
於・ハルズ八王子

五月二十八日「星の手向け」の一座。発句作者「喜雨」は藤澤拓也の俳号

ほぼ初心者のような筆者も含め、連句に初めて触れた参加者が多いなか、完成した作品を見て感じたことは、連句の持つ「人」「場」「歴史」とのつながりの力である。連衆の前句を受け取り、句や情景を繋いでいくという「人」とのつながりはもちろん、人が集まることによって生まれる場や、出会った場所・土地に意識を向け、句を繋ぎ、思いを馳せていく「場」とのつながりがある。そして、今回の街歩き連句では、星布の句を発句として連句を巻いていったが、今では決して会うことのできない人物であっても、今を生きる我々が句を通して取り上げ、今のことばで紡ぎ続けていくという、ダイナミックな「歴史」とのつながりも可能としている。

五月二十八日「星のちぎり」の一座

明治の俳句革新運動において「連俳は文学に非ず」と排され、連句は勢いを失ってしまったというが、ともすれば一句独立の志向性（排他性）を強く持つ俳句が失った、「つながり」「連」の喜びを、連句は現代にいたるまで保ち続けている。このことは、筆者が大学院で認知言語学の観点から俳句の研究を進めるにあたって、連句が常に示唆的な観点を与えてくれていることからも言えることである。

また、こうした「人」「場」「歴史」とのつながりの力を与えてくれる連句は、「均一化・空洞化」の波に振り回されつつあるグローバル化の中にあって、本源的な多様性と、立ち位置としての場を教えてくれるように思われる。今回、街歩きと連句を通して、八王子の魅力の発掘に取り組んだが、これは八王子に限らず、グローバル時代と郷土とをつなぐひとつのモデルケースになることを願ってやまない。

かつての日常を少しずつ取り戻し始めた今、小さな旅としての街歩きに、そして、榎本星布と桑・絹の歴史が眠る八王子にお出かけなさってみてはいかがだろうか。この取り組みが、連句・街歩き・八王子の魅力を伝える一助となったならば、筆者にとってこの上ない喜びである。

●筆者プロフィール●
藤澤拓也（ふじさわたくや）　平成十一（1999）年生まれ。新潟県出身。現在、創価大学大学院修士課程在籍中。俳句甲子園を通して高校時代に俳句を始め、学部時代に連句に出会う。大学院では認知言語学からみた俳句の表現と鑑賞の営みについて研究中。

第三十三回猫蓑同人会作品　1～4

一口坂の座

歌仙「緋色の鯉」　荒木　鑑　捌

釣堀の静寂に鯉の緋色かな　鑑
　梅雨の晴間に読書三昧　魚彦
見えぬやう弁当の蓋ずらしゐて　純子
　えんぴつの芯少し伸び過ぎ　壽子
月光は曇り硝子を通り抜け　尚子
　草の実残る脱いだ靴底　鑑
ウ 根つめてリトグラフ描くそぞろ寒　彦
　不動明王オーラ放ちて　純
目を皿に可愛い娘だけ検索中　壽
　別れぬ理由探しあぐねる　尚
デジタル化進むテンポはアナログで　鑑
　坂上り行き白き息吐く　彦
伯林の尖塔に見る寒の月　純
　煮物の匂ひ路地に流れる　壽
甲高で幅広の足父と兄　尚
　トンネル抜けて歌ふ「ふるさと」　鑑
懐かしき花朧なる向う山　彦
　急な斜面に仔馬追ひかけ　純
ナオ 伊勢参り感謝の心賽銭に　壽
　あんころ餅の餡が足りない　尚
国会は耳ざはりよき話だけ　鑑
　ひよつとこ踊りごまかしの芸　彦
おねだりにすねた振りして身を寄せる　純
下駄を揃へて秀吉の真似　壽
いただいた文を虫干ししてゐます　尚
　憂さ払ひには蝮酒飲む　鑑
振り返る過去の想念ぐるぐると　彦
　星より遠い海の不可思議　純
午前二時月が傾く西の空　壽
　新蕎麦すする外つ国の人　尚
ナウ ハロウィンに笑ふ妖怪勢揃ひ　鑑
　旅の土産に赤べこを買ふ　彦
思ひ立ち着付け教室駅の上　純
　細螺栄螺が桶を這ひ出す　壽
入口に花の迎へる美術館　鑑
　スローなブギに揺れる永日　尚

連衆　御園魚彦　近藤純子　杉山壽子
　宮川尚子

袖擦坂の座

歌仙「市ヶ谷堀」　内田遊眠　捌

みはるかす市ヶ谷堀はついり晴　遊眠
　道のほとりに昼顔の咲く　美智子
アカペラのテナー・バリトン豊かにて　香織
　エナメルの靴磨き込みをり　転石
十六夜のさやかなる影連れ帰る　あき子
　こんなところにえんま蟋蟀　織
ウ 秋祭焼けぼつくひに火がつくか　仝
　浮き名流した人と知りつつ　あ
ツンデレの彼女演じる面白さ　石
マンションで飼ふ三毛と豆柴　織
脚組んで露西亜新聞読みふける　あ
　寝息すやすや揺籠の中　智
カレンダー今年は閏年であり　石
　雪の連山月皓皓と　織
寒づくりよそへ出さない地元酒　石
　サステナブルに会社復興　あ
裏門を内に開きて花の寺　智
　三宝柑の皮を砂糖煮　織
ナオ ホームラン春天に向けかつ飛ばす　仝
　見学ツアー賑やかに来る　智
頼朝公これ九歳のされかうべ　石
　琵琶かき鳴らす声の哀愁　あ
巫女さんの仕立下ろしの夏袴　織
　肩まで長き髪を洗ひて　智
絡み合ふ熱い視線の大画面　織
　蛇口のホース伸びて縮んで　あ
いつの間にポテトチップス食べ尽くす　織
　電卓よりも早い暗算　仝
月の海むかしは何か泳いでた　石
　秋の名残のアトリエの画家　織
ナウ 赤い羽根鳥の名前が知りたいの　智
　誕生日には献血をする　あ
年少児サ行タ行が拗音に　織
　埴輪はまるく口をすぼめて　あ
湯巡りの切符片手に花街道　眠
　盤に飛車打つ逃水の頃　石

連衆　聖成美智子　平林香織　林　転石
　岩崎あき子

令和五年六月二十六日　首尾
アルカディア市ヶ谷

鍋割坂の座

歌仙「どくだみの」　江津ひろみ　捌

どくだみの花よ真白き十字架よ　ひろみ
夏野の果てに響く鐘の音　孝子
起立礼国語の授業始まりて　葵
玉子焼きから食べる弁当　秀夫
ガードマン深呼吸する月のビル　葵
やや寒げなる宿無しの猫　孝
ウ 髪長き時代祭の姫を賞で　夫
今宵は妻の機嫌とるなり　孝
ダイヤをばワイングラスに沈ませて　葵
君は征きけりアルプスを越え　孝
地形図に謎を深める地図記号　夫
月下の池に眠る寒鯉　孝
ぽかぽかと今川焼を懐に　夫
福沢諭吉久しぶりだね　葵
二つ目が枕で聞かす土曜寄席　み
鑑識が来て決める縄張　孝
満開の花に奇遇の縁あり　夫
たんぽぽの絮飛ばす想ひ出　孝
ナオ アルルカン春のかたみの厚化粧　葵
世の疫癘（えきれい）は神の怒りか　み
たくましく都会で暮らす鳩の群　葵
空き缶積んで何ぼにて売る　孝
おまいさん他に男はをりやせぬに　仝
背なの髑髏を洗ふ夕立　み
片方のビーチサンダル失くしたり　夫
水平線に飽きた船旅　葵
独裁が世界の資源操るか　孝
勝者は偉人歴史教科書　夫
少年の継ぐ菩提寺に月明し　孝
盆の用意は家族総出で　葵
ナウ 吹く風に歌ふが如き捨案山子　夫
夢よ叶へと願ふ幸せ　み
棟梁の研がれて蒼き鑿鉋　孝
たたらの里の技は脈々　葵
花の精宿り幾年巨樹となり　み
蜂が集めるささやかな蜜　夫

連衆　坂本孝子　石川　葵　田中秀夫

九段坂の座

歌仙「武家の町」　佐々木有子　捌

いにしへは武家の町なり夏の雲　有子
水嵩増せる梅雨の外濠　了斎
初浴衣あられ模様の気に入つて　富子
感じるけはひ振り向けば猫　徹心
次々と酒注ぎまはる月の宴　雅子
浅漬大根塩加減よし　雅
ウ ふるさとは早くも囲炉裏欲しきころ　斎
胸のうちには忘れ得ぬ人　雅
生き難き独り暮らしを切り上げる　富
秋葉原駅ミルクスタンド　雅
念願のおもちや出るまでガチャガチャと　心
親にうらみはないが底冷　斎
寒月へ背中の龍が頸を立て　心
決して入れぬ風呂屋温泉　斎
ガラス窓へのへのもへじ泣き始め　富
いつも鴉のとまる電柱　雅
登校の途次に花あり神社あり　斎
微笑む山に返す微笑み　雅
ナオ 春蝉の下チェンソーの男達　心
ヘアピンカーブにミラー輝く　仝
免停が続き危ふい免許証　斎
血圧計をまたも取り出す　富
腹上死だけはやめてと釘刺され　斎
私なしではだめねあなたは　仝
村はづれ赤い頭巾の地蔵さま　心
山下清スケッチの旅　雅
川と海と丘と野原を友達に　斎
北斗星ならすぐにみつかる　心
月見上げ新聞少年走り出す　富
雀いづれは蛤になり　斎
ナウ 行く秋に昔の友へ書く手紙　富
すりむいた膝塗つた赤チン　雅
大声で役者見得切る大舞台　富
おにぎり二個とお茶の弁当　心
廃駅はいつしか花に包まるる　有
座れば風に揺れるぶらんこ　執筆

連衆　鈴木了斎　名古屋富子　佐藤徹心
武井雅子

第三十三回猫蓑同人会作品　5～6

令和五年六月二十六日　首尾
アルカディア市ヶ谷

紀尾井坂の座

歌仙「銀の針降る」　鈴木千惠子　捌

坪庭へ銀の針降る梅雨かな　千惠子
　額紫陽花の競ひ咲く頃　忠史
キャンバスに無手勝流で描くらん　洋子
　パンの耳などときに齧つて　千
月今宵遠回りして帰らうか　史
　塾通ひの子虫すだく中　洋
ウ　瓜坊と母は街へと迷ひこむ　未悠
　きつともどるの言葉信じて　史
手切れ金払つたけれど腐れ縁　千
　いつの間にやら芸者稼業に　悠
肩パッド入れてキャリアを積み重ね　洋
　ランウエイではポーズばつちり　千
寒行が太鼓叩いてやつて来る　史
　雪見障子に青き月光　洋
大時計日々のネヂ巻き欠かさずに　悠
　受けた襷に友の魂　史
祝盃をあげる円陣花の舞ふ　千
　オープニングにシャボン玉飛び　悠
ナオ　節電で団扇作りの忙しく　洋
　週に一度はお灯明上げ　千
宿場町水場の辻に立つた札　史
　テラスで映える氷白玉　洋
家康の弱さに歴女はまりこみ　悠
　誕生石をことさらに言ふ　史
結納に三倍返し期待して　千
　あばたもゑくぼぽつちやりもよし　悠
国境の人種るつぼの交差点　洋
　胡椒に肉桂丁字茴香　千
難破船深く沈める月の海　悠
　澱も味はひ空けた濁酒　洋
ナウ　美術展解つたやうな顔をして　史
　二桁掛算幼稚園児も　仝
送迎をマイナンバーで管理する　千
　まるで倉庫のホームセンター　悠
花の下威風堂々始祖の像　洋
　楽日めでたく弥生狂言　執筆

連衆　根津忠史　大島洋子　棚町未悠

茱萸坂の座

歌仙「来るひとへ」　西田荷夕　捌

来るひとへ蛍袋の灯かな　荷夕
　木陰の莫蘿に憩ふ早乙女　肇
新刊書書架にきちんと並べゐて　霞
　自販機置かぬ当館の意地　敦子
銅瓦千鳥破風にも望の月　肇
　海猫帰る港嘈嘈　夕
ウ　ハロウィーン特殊メイクに凝る輩　敦
　ほんとの私誰も知らない　霞
国会の所信表明淀みなく　夕
　予想に反し金利上昇　肇
裾を引きヴァージンロードしづしづと　霞
　眷属集ひ回る凍月　敦
神武崇神はつくにしらす大八洲　肇
　酒を賜はる傭兵の長　夕
振替の休日続く製作所　敦
　道の駅にもドッグランあり　霞
水色のミニクーパーに飛花落花　夕
　額に当たりとける淡雪　肇
ナオ　いちねんせいお絵描き帳は春いつぱい　霞
　塾から塾へ送迎のママ　敦
行きつけのランチの皿にアイラブユー　肇
　恋わづらひは治さぬが良い　夕
遺伝子の鑑定をして勝訴して　敦
　晴れ晴れ仰ぐ今日の青空　霞
ハンカチはぴしりアイロンかけてあり　夕
　ランカスターの散りゆける薔薇　肇
映画館固き座席に囚はれて　霞
　あんぱん囓りぐつすりと寝る　敦
三日月をかすめＵＦＯ消えたとか　霞
　真言唱へ秋遍路行き　夕
ナウ　黄落のコートのラリー湧く拍手　敦
　再開発の進む外苑　肇
見るだけの客をもてなす若主人　夕
　舟徳利は江戸の初期作　肇
薄墨の千年の花嫋やかに　霞
　お玉杓子を掬ふ子供ら　敦

連衆　宇田川肇　高塚霞　武井敦子

第百六十四回例会
令和五年猫簑会総会作品　1～2
令和五年七月十七日　首尾
江東区芭蕉記念館

西瓜の座

歌仙「胡瓜を齧る」　奥野美友紀　捌

朝採りの胡瓜を齧るリズムかな　美友紀
　足ぶらぶらと揺らす裸子　雲呑
標高は基準点より割出して　肇
　またも消えたるスマホアンテナ　ひろみ
読みかけの本に栞を今日の月　あき子
　猫を抱けば背に草の実　あ
ウ 秋場所に里の力士の土俵入り　み
　天の岩戸をこじ開ける神　肇
マンションに君の指紋も登録し　呑
　私設の秘書にはづむ御手当　肇
豆絞りいなせに巻いて三代目　あ
　自分の名前付ける日本酒　呑
月蒼く凍つる国境鉄路越ゆ　み
　羊と共に寝起きする民　肇
病院の待合室にミレーの絵　紀
　喫煙所まで五百メートル　肇
ひとひらの花片を手につかまへて　呑
　山に登れば鐘は朧に　あ
ナオ 若人に幸あれかしと昭和の日　肇
　サーカス団の長い隊列　み
転校を重ねて生きる術を知る　呑
　少し濃い目に淹れる珈琲　あ
客船のプラチナ切符ひとりじめ　呑
麻服の袖風にふくらみ　仝
髪洗ふ女の姿眺めをり　紀
　コキュと言はれてそれも快楽　肇
スパイスを利かせたカレー評判に　あ
　日付またいで動く工場　み
月の出て踊りあかさん未来都市　肇
　急にうるさいほどの虫の音　み
ナウ 新米に渦を巻きたるマヨネーズ　呑
　瀬戸産の碗釉を掛け分け　肇
灯籠に心づくしの灯をともす　あ
　道ゆく人の声のひそやか　呑
この角を右に曲がれば花の家　紀
　たちまち融ける肩の淡雪　み

連衆　古和田雲呑　宇田川肇　江津ひろみ
　岩崎あき子

ラムネの座

歌仙「芭蕉堂」　永田吉文　捌

夏闌石段たどり芭蕉堂　吉文
　ぱつと広げて煽ぐ絵扇　有子
リサイクルドレスずらりと店頭に　美智子
　出前のバイクさつき出ました　秀夫
望月夜図鑑ばかりに見入る子ら　美代子
　小さきながらも蟷螂の斧　夫
ウ 丁寧な指導を受ける村芝居　代
　応援団長できぬ告白　夫
幾度も書いては捨てたラブレター　有
生成AIフルに活用　代
留守電に深く礼する母のゐて　智
　もらつた仔犬けふもおすわり　代
ショパン聴く窓に大きな寒の月　智
　ホットウィスキー舌にまろやか　夫
瓶と缶回収の日は水曜日　有
　諜報員に届く暗号　夫
列島の花の名所を制覇せん　有
　芥菜きざむ包丁の音　智
ナオ 春炬燵連続ドラマ始まりて　夫
　いつのまにやら覚えたる経　吉
天才と呼ばれた程の記憶力　有
　アプリの鳴らす地震警報　智
本物がお化け屋敷に出たらしい　夫
　祭のなかに消えた少年　代
事件には裏の真実恋がらみ　有
　逢へば乱るる閨の黒髪　吉
キャッチャーはどんな球でも受けとめて　有
　古いコピー機新コイン無理　仝
香港に更待月の貨物船　夫
　高層階を渡る雁見ゆ　代
ナウ 美術展自画像を出し初入選　智
　三日遅れて郵便が来る　有
この頃は昭和の歌を口ずさみ　夫
　地球再生まづ身近から　智
花といふ花に満ちたる神の愛　吉
　挨拶交はす青帝の朝　智

連衆　佐々木有子　聖成美智子　田中秀夫
　山田美代子

第百六十四回例会
令和五年猫簑会総会作品　3～6

氷いちごの座

歌仙「納涼舟」　石川葵　捌

国芳の猫褄とるや納涼舟　葵
ふはりふうはり薄翅蜉蝣　香織
奥座敷八冠目指す棋士の居て　忠史
径に誰かの影の佇む　徹心
月覗く精密機器の眠る頃　荷夕
秋の夜長のハッカドロップ　葵
ウ　能管の切り裂く静寂冷まじく　織
人気女形の背の艶やか　史
致死量をいざ飲み干さん愛の毒　心
融資引上げ迫る外交　夕
落とし物財布届ける駐在さん　葵
スマホゲームを孫に教はる　織
新調のスノータイヤで月の道　史
今中天に寒昴あり　心
乞食の古き訛の懐かしく　夕
井戸端会議やつとかめから　葵
町衆を守り守られ花大樹　織
元気いつぱい青き踏む爺　史
ナオ　一汁一菜誕生日には目刺付け　心
開墾の地の教会の鐘　夕
慈善市トムとジェリーのシール売り　葵
ＰＴＡの雑務あれこれ　織
肌脱のむきむきの腕うつとりと　史
汗も好ましい相愛の仲　心
踏石の蝮とぐろを巻きもせず　夕
フィボナッチ数列に潜む美　葵
ボランティアピサの斜塔を案内し　織
水分補給忘れないでね　史
「のの様」と月に願ひの小さな手　心
鶏頭燃ゆる角の駄菓子屋　夕
ナウ　震災忌大漁旗の文字踊り　葵
夢の続きを見んと二度寝す　織
ジャンボくじ捕らぬ狸の十億円　史
譲り受けたる棚の地球儀　心
酒家の客花の盃ほろほろと　葵
山の斜面に実るオレンジ　夕

連衆　平林香織　根津忠史　佐藤徹心
西田荷夕

ソフトクリームの座

歌仙「姫沙羅や」　近藤純子　捌

姫沙羅や水の匂ひの風わたる　純子
どこで鳴くやら初蝉の声　健
脳髄の芯の痺れる心地して　了斎
ヨガのポーズで壁に逆立ち　敦子
月照らす一本道を肩車　惠子
冬近き灯の洩るる街並　純
ウ　濁酒飲めば出てくる国訛り　健
説教のあと口説き始める　斎
思ひ当たるわが父親の女癖　敦
パイプの煙ゆらゆらとゆく　惠
新製品ユーザー視点ふんだんに　純
翁苦吟の像を訪ねる　健
天才も凡才も皆寒月下　斎
スノーモービル走るシベリア　敦
家ごとにボルシチはみな母の味　惠
三毛猫のたま膝に乗りくる　敦
山城の鯱めぐる花嵐　健
遠くに並ぶ耕の人　惠
ナオ　繰り返す遍路はすべて徒で打ち　斎
積立貯金月に千円　敦
中国の十二支戌の次は豚　斎
マッチングアプリ親も勧める　純
夏の恋アロンアルファでつなぎ止め　斎
お化け屋敷で計る本気度　敦
石庭で心静かに一日を　惠
フランス刺繍ブックカバーに　敦
翻案の劇の切符がはらと落ち　純
革命勝利告げる流星　健
老人が昔をしのぶ月の鎌　敦
染み入るごとき虫の音を聞く　惠
ナウ　分校に今も残れる机椅子　健
拳玉歌手のギネス登録　敦
健康のためと薬を煎じゐて　惠
青き踏みゆく軽き足取り　斎
薄墨の花に若木の継がれたる　純
次から次へ光る春飛魚　執筆

連衆　由井健　鈴木了斎　武井敦子
渡辺惠子

蜜豆の座

歌仙「片陰り」　高塚霞　捌

片陰り拾ひ拾ひて芭蕉庵　霞
池水に映る緑涼しき　孝子
皿に盛る老舗の菓子をそれぞれに　正夫
ゆつたり座るリビングのソファ　雅子
ミステリー大団円の月今宵　魚彦
囮籠には工夫こらして　雅
ウ 爽やかに棟梁祝ふ木遣唄　孝
寡黙な人の愛は濃やか　雅
恋ごころひたすら綴る手漉和紙　夫
需要供給株価不安に　孝
プーチンとゼレンスキーとバイデンと　夫
明日になれば今日は歴史か　彦
神の留守畏み月の昇り初む　雅
橇の鈴鳴る幼児の夢　孝
僕の犬駄犬とはいへ賢くて　仝
連続ドラマ欠かさずに見る　夫
酒を賞で久闊を叙し花莚　孝
魚島時の瀬戸内の海　雅
ナオ 遍路笠先を競ひて札所まで　彦
必死に探す寺の跡継ぎ　雅
当代の人気を攫ふ講釈師　孝
舞台に並び述べる口上　夫
世の中に兎角噂の袖の下　孝
こんな所で石に躓く　雅
泣かないで必ず守つてあげるから　霞
サングラスして大胆になり　雅
姐さんが第四夫人に納まつて　彦
心の隅に故郷の山　雅
旧校舎月に静まる佇まひ　夫
美術の秋に揃ふ傑作　雅
ナウ 考へる事の多きもうそ寒く　孝
腰の痛みと長い付きあひ　雅
公園のラヂオ体操大集合　夫
芸能界へ蝶の羽化せる　彦
花簪百鬼に紛れ舞ひ狂ふ　霞
息吹きかけて払ふ黄塵　彦

連衆　坂本孝子　國司正夫　武井雅子
御園魚彦

泡雪羹の座

歌仙「鉾稚児」　三木俊子　捌

鉾稚児の神降る貌に手を合はす　俊子
風死する中響くお囃子　千恵子
積ん読の山はインコの遊び場に　英雄
ワックス掛けたピカピカの床　転石
満月に歓声あげる客のゐて　をんみ
木の実しぐれに露店広げる　石
ウ クレパスを取りだしてみる文化の日　千
君の似顔絵まるで似てない　英
あばたでもゑくぼに変はる恋心　み
越路吹雪は永遠のアイドル　英
推し活に就活はては終活も　千
加湿器の先揺れる月見る　仝
病棟の窓辺においた冬菫　石
ゲーテの詩集低くドイツ語　み
ソーセージ祖父のレシピを受け継いで　千
代々で家守る番犬　仝
歌自慢お国自慢も花の宴　英
淡雪肩に上野公園　み
ナオ アサギマダラはるばる来ぬる旅思ふ　千
山頭火にも安らぎの地が　英
鉈彫の仏の像はもの言はず　石
闇の市場でやつと落札　み
アフガンの荒野に咲かす罌粟の花　石
銃の修繕励む片陰　英
物作り覚えることの多すぎて　み
姫の好みをこまごまと知る　千
はにかみ屋閨大胆に様変り　石
島の点景レンズはみ出す　千
能役者罪得て月の流離譚　石
水琴窟の音のさやけく　千
ナウ 溢蚊に情けをかけて見過ごして　み
二度目は法度せこいセクハラ　英
断固拒否断固抗議で女あげ　千
振る指揮棒はいつも絶妙　石
花の雲眼下に望むつひの家　俊
鳩追ひをれば出会ふ初虹　英

連衆　鈴木千恵子　鈴木英雄　林転石
福澤をんみ

令和五年七月十七日　首尾
江東区芭蕉記念館

令和五年四月八日　首尾

第十四回猫蓑会リモート Zoom 14

1～3

夕霧の座

半歌仙「半里にいくつ」　鈴木了斎　捌

海までの半里にいくつ花の寺　了斎
　大仏越しにかかる初虹　濤声
焼諸子あてに乾杯ホテルにて　敏枝
　泡のガラスを次々に吹く　桃胡
市中に三代続く錺職　声
　雪解の富士の浮かぶ月明　枝
ウ　麻服を整へて行く先もなし　胡
　おやつくれろとせがむプードル　声
組合と無縁に過ごす若者ら　仝
　冬の時代と嘆く老人　斎
ひねもすをやはらかな手に介護され　声
　わが妻いまも生娘に似て　枝
満月の吉永小百合大胆に　胡
　妙なところへぶらり蓑虫　枝
廃屋に木の実時雨の降り止まず　胡
　浪人の兄昼もまだ寝る　枝
推し一筋ただただエモい生き方を　声
　今日も今日とてライブ三昧　執筆

連衆　小原濤声　箭内敏枝　裏谷桃胡

御法の座

半歌仙「気づかぬままに」　上原揺子　捌

いつからと気づかぬままに日永かな　揺子
　腕のピンクはもしや春の蚊　健
花の道遠近人のにぎやかに　香織
　はうじ茶の香のほのと流れ来　鄭和
水墨画掛けたる軸に月の影　健
　山を越えゆく雁の声聞く　揺
ウ　旅の宿名を問はれなば吾亦紅　和
　何を言つてもしてもかはいい　織
区役所に同性婚を届け出て　揺
　長年の夢巴里のオペラ座　健
二時をさす幽霊船の古時計　織
　しやくれ弓張涼にさまよふ　和
祝勝のビールのシャワー皆笑顔　健
　修道僧の上手い商ひ　揺
青空にふんはり浮かぶ雲ひとつ　和
　アンパンマンはみんな大好き　織
合唱の園児を囲むチューリップ　健
　仕出し弁当持つて野遊　執筆

連衆　由井　健　平林香織　髙山鄭和

幻の座　朱鷺庵文子宗匠追悼

二十韻「朱鷺色の街」　鈴木千惠子　捌

朱鷺色の街を訪ふ春の夢　千惠子
　匂ふがごとく桜桃の花　照子
レガッタを漕ぐ若人ら声かけて　裕介
　母はおかつぱ姉もおかつぱ　雲呑
ウ　路地裏に祭太鼓の響く月　照
　金魚と指輪買つてあげるよ　千
レオタードぼんきゅつぼんのくつきりと　呑
　枯山水の渦紋掃きたる　介
酒のあて一文字ぐるぐるつまみつつ　千
　反魂丹で店は繁昌　照
ナオ　先物の相場泣く奴笑ふ奴　介
　艶の増したる古き能面　呑
初めての巴里公演は成功し　照
　なかなか逢へぬ君は織姫　千
密事月はとつくに知つてゐる　呑
　手持無沙汰でピーナッツ剥き　介
ナウ　スヌーピーいつも窓辺で微笑んで　千
　ちんちん電車濠端を行く　照
明日よりは花守人となる覚悟　介
　指さす方を見れば初虹　呑

連衆　五郎丸照子　和田裕介　古和田雲呑

令和五年六月十日　首尾

第十五回猫蓑会リモート Zoom 15

1～3

短歌行「朱夏の踝」　西田荷夕　捌

匂宮の座

汀線を朱夏の踝跳ねて行く　荷夕
浜昼顔の背伸びする群　桜千子
建築のコンペティションに応募して　祐介
谷間に見ゆるつつましき屋根　敏枝
ウ　凍月を背に牧童の声はやり　純子
太腹(ふとはら)鱸シチュー仕立てに　夕
飲める酒飲めぬふりしてしなだれる　桜
三文芝居もれる溜息　祐
医者も言ふ恋わづらひに打つ手無し　枝
捨てる基準は消費期限か　純
花の下ボンネットバス停まります　桜
霞棚引く故郷はまほろば　夕
ナオ　振り向けば石落つるごと告天子　祐
砂場に残るシャベルぽつねん　枝
見習ひのパティシエ今日もだめ出しを　純
国際会議同時通訳　夕
瞬殺は罪に問はれぬはずだけど　桜
浅茅の径をいつかふたりで　祐
抱き合うて金波銀波の月の湖　枝
木の実降らせる魔女のひと振り　純
ナウ　平岡翁※トレモロの曲軽快に　夕
此処がよいのと膝で寝る猫　桜
いつの日も花の隣は空けてある　祐

旧友を訪ふ清明の朝　枝

連衆　鵜飼佐知子　和田祐介　箭内敏枝
近藤純子

※木琴奏者　平岡養一（1907～1981）

半歌仙「水の構図」　本屋良子　捌

紅梅の座

ほうたるに水の構図の変りけり　良子
何か潜める河骨の岸　香織
楽隠居コンピューターを操作して　蝸舎
赤い付箋をはさむ新刊　照子
銭湯の三角屋根に月皓と　織
後の袷をかき合はす叔母　良
ウ　美術展エゴンシーレに対峙する　照
気の狂ひたるお七あはれの　蝸
思はぬと思へど勝る君の影　良
ちびた鉛筆ずらり並べて　織
土俵入り待つ間の力士深呼吸　蝸
寒月の下馬乳酒の宴　照
冬枯の野をまつすぐに貨車の行く　織
木乃伊の瞳どこを見やるや　良
国籍をZ世代はひよいと越え　照
団子食ひつつ英文を読む　蝸
花の下うつらうつらと午後の色　仝
晴天高く上る風船　照

連衆　平林香織　岩田蝸舎　五郎丸照子

半歌仙「榧の樹影」　佐藤徹心　捌

竹河の座

五月雨や榧の樹影の揺れもせず　徹心
階に沿ひ十薬の花　あき子
エチュードを姉妹連弾軽やかに　志保子
居間の奥から仔犬駆け来る　鄭和
いざよひの招く湖畔に椅子並べ　あ
先急かされるやや寒の坂　心
ウ　母と娘が揃ひの衣装ハロウィーン　和
いつも薄荷糖ボンボニエール　志
湯治場の土産のこけし澄ましてる　心
幼なじみが妙にきれいに　あ
握つた手薬指には真珠玉　志
一番銛の肩に昼月　和
悴んで刺子あはせの剣道着　あ
しはがれ声を酒でうるほす　心
神前に畏まりたる権の祢宜　和
バックパッカーうららかに行く　あ
木漏れ日の野点の席に飛花落花　志
川辺に憩ふ春の夢たち　和

連衆　岩崎あき子　北龍志保子　髙山鄭和

令和五年六月十日　首尾
第十五回猫蓑会リモート Zoom 15
4

橋姫の座

二十韻「青葉風」　鈴木千惠子　捌

全身で呼吸してみる青葉風　千惠子
　石榴の花のはや孕みをり　了斎
厩舎には出走を待つ馬のゐて　転石
　毛布かかへて落ち着かぬ膝　房子
ウ　滑つてはいけない坂の雪月夜　斎
　祖父の葬儀にいとこはとこも　千
百年のパイプオルガン鳴り渡る　房
　夫君したがへ女王おごそか　石
天蓋の下でやさしき口づけを　千
　ランプこすれば現れる奴　斎
ナオ　こそこそと債鬼の影におびえつつ　石
　暗証番号盗みとられる　房
のんびりと暮らす縄文村の秋　斎
　落栗拾ふ兄と弟　千
月に棲む兎が婆のお話に　房
　鉄砲抱いて酒を酌み合ふ　石
ナウ　ご維新の志士は紙幣の顔となり　千
　人も動いてゐる蜃気楼　斎
花守がしつかと支へ花大樹　石
　つい鼻歌の混じるのどけさ　房

連衆　鈴木了斎　林　転石　室　房子

令和五年二月二十三日　首尾
第十三回猫蓑会リモート Zoom 13

鈴虫の座

半歌仙「忘れたる」　裏谷桃胡　捌

忘れたる鉢に顔出すもの芽かな　桃胡
　かたびら雪に栗鼠の足跡　房子
伝来の雛人形と遊ぶらん　純子
　好みのマグに淹れるコーヒー　香織
ウ　大空にしらじら沈む明けの月　敏枝
　赤い羽根つけ朝練の子ら　純
新米のでかいお握り五個作る　房
　あつき掌ふつくらとして　胡
空蟬と軒端荻が入れ替はり　織
　できちやつた婚母お墨付　枝
ナオ　口ほどで無し婿殿の預金高　仝
　ロックンロールプレミアム席　房
夏の月自家用ジェット追ひかける　織
　川辺屋台で冷やを一献　純
住職は四季折々の富士を描き　枝
　鴉がさつと舞ひ降りる道　織
ナウ　花だより待ち遠しくて日をめくり　房
　ユーチューブみる長閑らかな午後　織

連衆　室　房子　近藤純子　平林香織
　箭内敏枝

（この作品は都合により掲載が遅れました）

令和五年八月十一日　首尾
第十六回猫蓑会リモート Zoom 16
1～4

椎本の座

半歌仙「門火かな」　石川　葵　捌

一瞬の静寂生まるる門火かな　葵
　月を招かむ東の峰　純子
栗飯を釜にほつこり炊き上げて　暁巳
　兄弟喧嘩ちよつとお預け　をんみ
今後とも行方気になる名人戦　揺子
　鷺草活ける床の竹筒　純
ウ　ごきぶりがゐたと背中に齧り付き　巳
　十年越しで狙つてた彼　み
念のため出会ひアプリは続けよう　揺
　内緒で僧は鬘購ふ　葵
紫禁城月下の影の冴え冴えと　仝
　平和を願ひ浸かる冬至湯　純
飛入りでゲイプライド※に参加して　揺
　腰痛こらへ坂道を行く　み
緩やかに年を重ねて孫数多　純
　山の笑ひを犬は聞くなり　揺
花筏渦の変はり目おもしろく　巳
　友と乾杯春雨の窓　み

連衆　近藤純子　島村暁巳　福澤をんみ
　上原揺子

※LGBTプライドの意

総角の座

二十韻「神の道」　鈴木了斎　捌

真ん中は神の道なり秋茜　了斎
一面蕎麦の花の満開　転石
十六夜の大黒柱磨くらん　あき子
ぐづる赤子をあやしあぐねる　志保子
ウ アンパンマンばいきんまんもTシャツに　銀河
尾を曳くやうに飛ぶ打球音　あ
旅に出る連れは賢治と朝風と　河
酒少々で足りる人生　石
お決まりのヒグマ警報今日もまた　志
キラウエア山にいつもマグマが　河
ナオ 舵を切る漁師は天の星を見て　石
板に刻んだ絵文字解読　あ
お宝は家の蔵から現るる　河
汗の逢引いつも暗がり　斎
帰るのはいややとすねる夏の月　志
機織る音のひびく川沿ひ　仝
ナウ 巴里目指す少年達のブレイキン　あ
手話うららかに奔放な夢　仝
あの山の先まで花を咲かせたい　石
影軽やかに青き踏む人　あ

連衆　林　転石　岩崎あき子　北龍志保子
中谷銀河

早蕨の座

半歌仙「寝返りて」　佐藤徹心　捌

寝返りて夢の続きへ萩の風　佐藤徹心
生姜を刻むキッチンの音　小原濤声
名優は三日月の眉描くらん　平林香織
膝を崩して珈琲を飲む　室　房子
農道をそれぞれに牛帰り行く　箭内敏枝
麦わら帽子引つかかる枝　織
ウ 初めての油絵に画く皐月富士　声
教授の指導やたら細かく　仝
彼のためミニスカートをはいたのに　房
蓼食ふ虫も恋もすきずき　声
背の灸我慢比べの男ぶり　枝
別府地獄のあとに一献　声
ミネソタは湖も凍結してゐます　房
益々黒き寒鯉の影　心
冬月に交響曲は二楽章　声
待ち遠しきは次の引越　枝
折紙と花に囲まれ祝ふ街　房
母子うららにホップステップ　執筆

連衆　小原濤声　平林香織　室　房子
箭内敏枝

宿木の座

二十韻「仁王立」　大島洋子　捌

今日もまた仁王立する残暑かな　洋子
学園通り酔芙蓉咲く　敦子
居待月香を燻らせ招くらん　照子
折紙細工飾る玄関　千恵子
ウ 代々のこけし人形譲り受け　白山
首のすわりのいまいちな吾子　洋
入籍は洗礼式を終へてから　敦
ボランティアには力持ちゐて　照
ゆるキャラが餅を搗いてる商店街　千
冬至南瓜はもう喰ひ飽きた　山
ナオ 西郷どんも好む大島紬なり　洋
赤のリードで犬のお散歩　敦
裏参道厚き恋文手渡され　照
洗ひ髪して待ち合はせする　千
七賢と酒酌み交はす夏の月　山
風わたりゆく水墨の山　洋
ナウ 宝物隠した場所がわからない　敦
海苔干す人の遠く近くに　照
鈍行のひと駅ごとの花の旅　千
蝶のゆらゆら天下泰平　山

連衆　武井敦子　五郎丸照子　鈴木千恵子
由雄白山

真夏のなごや応援連句会

宮川尚子

「猫蓑会の有志を募って名古屋を応援しに行きます」と鈴木千恵子会長からメールが来た。「ちょうど八月五日の日曜日がねじまき連句会の日で、壽子さまも葵さんも一緒の会なんですよ」、じゃあ、と話がとんとん拍子に進み、佐藤徹心さんがどんどん段取りをしてくださって八月五日に夢のような連句会が実現した。

東京方面や、富山・宇都宮からの猫蓑会のみなさんに加えて、横浜の渡辺柚さんや鹿児島の五郎丸照子さんも駆けつけてくださった。なごや部隊は、ころも連句会、桃雅会、ねじまき連句会、竜神連句会のメンバーが参加して総勢三十四名。七座に分かれて実作を楽しんだ。

名古屋は当日もただならぬ暑さだったが、会場はそれに負けない熱気にあふれていた。話し声や笑い声が幸せの音色だということを実感する時間だった。応援をいただいた「なごや」の中でも、ねじまき連句会は連句経験の浅いメンバーが多く、グループ外の方との実作会の機会もなかったので、刺激をいただきながら勉強できて、きらきら気分を満喫した。何より有難いことである。

実作会後の懇親会にも多くの方が参加してくださって、楽しく、そして真剣に話をしながら親交を深めることができた。

人と人が集うこと、連句を巻くこと、心が行き交うこと、そういううれしさをかみしめることのできた夏の一日である。応援されたなごやの一員として、今度は真冬にでもどこにでも応援に駆けつけることを心に誓っている。

岡崎城の座　林 転石　捌

松平東照宮の座　石川 葵　捌

大樹寺の座　大島洋子　捌

滝山寺の座　平林香織　捌

高月院の座　鈴木千恵子　捌

六所神社の座　髙山鄭和　捌

伊賀八幡宮の座　渡辺 柚　捌

連句の先達・誌上インタビュー　Q&A

その❸　杉山壽子さん

Q1●連句歴はどのくらいになりますか。

A　昭和六十三年から始めましたから三十四年ほどです。

Q2●連句を始めたきっかけは何ですか。

A　熱田神宮に愛知県指定文化財「寛永三年・十八年熱田万句」を岡本宮司様から賜り、読み、連句を知り、明雅先生の指導を受けました。

Q3●初めての実作の場はどこでしたか。どのような様子でしたか。

A　平成元年四月二日奉納連句（後掲）。於・熱田神宮龍影閣。

東明雅先生をお迎えして、熱田神宮岡本健治宮司様が主催されました。（以下はその表六句。左の写真はその一巻全体の懐紙）

俳諧之連歌　歌仙行

神の花また新しや今朝の雨　明雅
鶏鳴のどかめぐる瑞垣　千町
わらべらはお玉杓子を育てゐて　清子
煮こんでをりぬシチュー大鍋　正江
月で候鼓の朱房だきしめん　和子
小重陽なり冬もすぐそこ　雅

当日の歌仙行懐紙四面。左下がりの「藤の花書き」

Q4●明雅先生との思い出を教えて下さい。

A　「連句をするなら東明雅先生だ、彼は学者として、人間として本物だ」と、信州大学の先輩教授であった玉川治三伯父の薦めで「本物」にご指導を受けたく思いました。

Q5●連句をやっていて、よかったことは何ですか。

A　「連句」という文芸を深く知ることができました。連句の方たちから学ぶことが多く、楽しい文芸を嬉しく思います。

Q6●印象に残っている付け（または、発句、一巻など）を教えてください。

A　組鐘（カリヨン）の淡き音色や夕端居　明雅
木椅子置かるる夏深き庭　壽子
観光団ガイドの旗を先頭に　明雅

明雅先生が学び初めの私に発句を下さり、両吟で初めて巻いた二十韻の三句のわたりです。あの頃はハガキで付け合いました。先生からの発句でご指導を受ける幸せを感じました。皆さんに妬まれました。

当日の連衆

Q7●連句の後輩にアドバイスがあれば、お願いします。

A　私は手取り足取りでご指導を受けました。まっさらな頭に水がしみ込むように新鮮でした。素直な気持ちで学びますと楽しい時間と幸せな心に満たされます。どうぞ初めて学ぶあなたもお幸せな時間を、とお祈りします。

桃雅会の初期メンバー（桃雅会は明雅先生のご指示で作られた、名古屋の実作会。後列右から二人目の式田和子先生が毎月指導にあたられた。前列右が壽子さん

事務局だより

●既往の行事

・六月二十五日（日）に、アルカディア市ヶ谷にて、第三十三回猫蓑同人会総会を開催（前号既報）。議事ののち、六卓に分かれて歌仙を興行。当日作品は今号4ページに掲載。

・七月十七日（月・祝日「海の日」）に、江東区芭蕉記念館にて、第百六十四回例会（猫蓑会総会）を開催。議事ののち、六卓に分かれて歌仙を興行。当日作品は今号7ページに掲載。

●今後の行事予定

・十月十八日（水）に、江東区芭蕉記念館にて、第百六十五回例会（芭蕉忌・明雅忌）を開催予定。芭蕉忌正式俳諧興行の後、根津芦丈師発句による脇起源心を興行。

・一月二十八日（日）に、江東区芭蕉記念館にて、第百六十六回例会（令和六年初懐紙）を開催予定。歌仙を興行。

・四月下旬に、亀戸天神社にて、第百六十七回例会（藤祭例会）を開催予定。神楽殿にて正式俳諧興行（一般公開）の後、二十韻を興行。

●猫蓑会リモート（ZOOM）連句会

・二月二十三日（木）開催の第十三回の未掲載作品を今号12ページ、四月八日（土）開催の第十四回作品を10ページ、六月十日（土）開催の第十五回作品を11、12ページに掲載。

・第十六回を八月十一日（金・祝日「山の日」）に開催。当日の作品を今号12ページに掲載。

・第十七回を十月九日（月・祝日「スポーツの日」）に開催。当日の作品は次号に掲載予定。

・第十八回を十二月九日（土）に開催予定。

●令和五年度の猫蓑会運営体制

会長　鈴木千惠子
副会長　鈴木了斎
　　平林香織
理事　林　転石
　　佐々木有子（事務局）
　　武井雅子
　　佐藤徹心（会計）
　　田中秀夫（会計監査）
運営委員
　猫蓑通信編集委員（下記奥付参照）
　事務局補佐
　　高塚　霞
　　江津ひろみ
　　武井敦子

●リモート連句講習会を開催します

・ご希望があれば奇数月第一土曜日に、「猫蓑会リモート室」にてリモート連句講習会を開催します。筆記係やホストを務めるために必要な事柄も。ご希望の方は、平林香織《khira884@gmail.com》宛にメールでお申し込み下さい。

●猫蓑会リモート室をご利用ください

・会員は、「猫蓑会リモート室」を無料で、時間制限なしに使用できます。文音などに代わる手段として、遠隔地に住む連衆どうしの一座などに利用していただいています。文音よりも対面しての一座に近い興行になります。会員が借りれば会員外の方も含めて利用できます。お仲間との交流や打合せにもお使いください。希望日時に他の使用予定があるかどうかの問い合わせなども含め、これも平林香織宛にメールでお申し込みください。

●猫蓑作品集二十六にはまだ残部があります

・一部二千円（送料含）。ご希望の方は平林香織宛にメールでお申し込みください。

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

・五郎丸照子様　令和五年七月　三千円
・匿名　令和五年七月　三万円
・永田吉文様　令和五年九月　五千円
・匿名　令和五年九月　一万円
・基金口座　みずほ銀行新宿新都心支店
　猫蓑基金　普通預金　3376045

●新会員

・山内裕子（やまうちゆうこ）（鹿児島県）　令和五年九月入会

季刊　『猫蓑通信』第百二十二号
　令和五年十月十五日発行
発行人　猫蓑会　鈴木千惠子
事務局　佐々木有子
　〒161・0033
　東京都新宿区下落合4・9・34・313
編集人　鈴木了斎
編集委員　奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千惠子・武井雅子・平林香織・御園魚彦
　（五十音順）
印刷所　印刷クリエート株式会社